

---

# 消失した記録～ロストメモリー～

風鈴龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

消失した記録～ロストメモリー～

### 【Zコード】

Z2189Y

### 【作者名】

風鏑龍

### 【あらすじ】

荒廃した世界・・・魔王を名乗る者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・

その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのをとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じよう記憶を無くしていく・・・

そして、お互に懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入了た。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか?

それとも・・・・・・

ハンゲームのサークル「自作小説投稿所」と言う所にも投稿しています。

## 第一話 田覚め（前書き）

荒廃した世界・・・魔王を召喚する者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・

その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのをとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じようだ記憶を無くしていく・・・  
そして、お互いに懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・  
少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・  
助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入了。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・  
人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・  
人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか？

それとも・・・

## 第一話　目覚め

うつすらと感覚が戻り、体中に違和感を感じる・・・

動けない・・・体が動かない・・・ここは何処だらうか？

体はあるで鉛の様に重く、拘束されているのでは？と思つ程である・・・

川の流れる音がする・・・川原だらうか？

そこまで思い至つた・・・しかし、そこで意識は急激に暗闇に沈んで行く・・・

ここは人が行き着いた先・・・遠い遠い未来の物語。

人々が行き着いたのは天国でも桃源郷でも無く。

何もない・・・荒廃した世界・・・

人々は魔力を科学的に生み出し、その魔力から魔法を生み出した・・・

より肉体的に優れた種を・・・人々はDNAを弄り・・・獣人を生み出した・・・

機械こそ至極・・・機械に知能を与え・・・それが裏目に出て・・・  
殺戮機械が完成した・・・  
キルリングマシーン

魔法によって突然変異を起こしたウィルスによって魔物が生まれ。そして魔王が現れ・・・世界は腐敗し破滅を迎える。

貴方なら・・・そんな世界で何を求めますか？

うつすらと目を開ける・・・意識がゆっくりと起動を始める・・・「こ」は何処だらう？

？？？ 「大丈夫？」

声をかけられ・・・初めて人が居るのに気がつく・・・

声を発した者は白衣を来た女性である・・・「こ」で意識が完全に起動した・・・

白衣の女性 「大丈夫？」

もう一度聞かれた・・・とりあえず答えようと思いつの口を開くが・・・

？？？ 「大丈夫です・・・」

体中に違和感を感じるが、特に動かなかつたりはしないのでそう答える。

白衣の女性 「ん・・・まあ、特に怪我は無いみたいだし・・・大丈夫よね・・・」これは何本？

女性は何かの紙に色々書いてから、指を一本立てて田の前に立て質問してきた。

？？？ 「一本・・・」

「一本」と答えるも何の特にもならなそつなので、

特に捻くれもせざ正直に答える。

白衣の女性 「正解・・・じゃ、これは何?」

女性は手に持ったボールペンをひらひら見せてきた。

？？？ 「ボールペン」

これも正直に答える

白衣の女性 「じゃ、使ってみて」

女性はノック式のボールペンを差し入れしてみた・・・

カチヤツカチヤツとペン先を出し入れしてみる・・・

白衣の女性 「ん~・・・大丈夫と、名前は?」

ここに来て名前を聞くのか・・・普通は最初に聞くのではないのだろうか?

とつあえず自分の名前を答える」とこした

？？？

「 知前は・・・なま・・・」

言葉に詰まる・・・思い出せない・・・

白衣の女性 「 どうしたの？まさかわからないとか」

女性は笑いながら聞いてくる。

？？？ 「 ・・・」

「 」 が何も答えない女性は笑うのをやめ、真剣に が見れる。

白衣の女性 「 まさか・・・マジでわからな感じ？」

？？？ 「 ・・・はー」

返事をしながらも思考の海に潜り込んでいく・・・

自分は誰だ？

## 第一話 出会い

自分の名前を思い出せず・・・殆どの事は思い出すことも出来ない・  
・記憶喪失・・・

だけれども、一部思い出せる部分があった・・・断片的だが・・・  
高い所から落ちていてる時の映像・・・

何故落ちていたのかはわからない。

ただ、思い出せたのは、高い所から落ちていてる時の浮遊感と・・・

水に叩きつけられた時の衝撃・・・

それと、落ちている時にもう一人居た・・・茶髪の活潑そうな印象  
の 少女。

その少女の名も思い出せない・・・しかし・・・なぜかその少女は  
とても親しい人物だと感じた・・・

何故だかはわからない・・・唯、その少女は自分が水面に叩きつけ  
られる随分前に喪失していた・・・

記憶が断片的なので状況がまったくわからなかつたが・・・

これは憶測であるが・・・

多分、自分はその少女と何かをしていた 何かをしようとしてい

たのだれい。

しかし、その途中で高い所から落び・・・落とされた?・・・そして、

その少女は落下の途中で何かの魔法を使って助かり、

自分は魔法を使う余裕も無く水面に叩きつけられたのだろう?・・・

そして、そこには自分が倒れていた河原の上流だったのであるが。

そこから流れ、偶然にもあの河原にたどり着いた・・・そう考えるのが普通ではないだろうか?

河原に倒れていた自分を助けてくれたのは「マジックキャバル魔術結社」と言つギルドの隊員であった。

その隊員達はその地域の魔物を討伐する為に組まれたチームであり、

河原に倒れている所を発見した時に、既に力尽きていたと思つたらしい。

しかし、実際には息があつたらしく、咄嗟にここにひつれて来たそうだ。

ここに来てから2日程は寝続けていたらしい・・・

ここは地下に作られた地下都市である。

出入りは基本的に転移装置か魔法か数箇所存在する出入り口で行つ。

目を覚ました場所は地下都市のギルド本部の医療室・・・まあ、いわゆる病院である。

最初に出会つた白衣の女性はミラーズと名乗つた。

その女性は少年に対しても呼び名が公用だと判断し、一時的にだが

「名無し」と言つて名乗つて呼ばれる事になつた。

ミラーズ 「記憶喪失・・・強い衝撃や精神的ショックを起こした時に起かる病気の一種ね・・・

ただ・・・水面に叩きつけられた時の衝撃は相当な物だと思つただけれど・・・

体に目立つた打撲が無いのは何故かしら?」

名無しの腕や足や背をべたべたと触つて外傷を確認するが、特に外傷らしい外傷も無い・・・

今まベッドに腰掛、ミラーズを向かい合つて座つている。

ミラーズ 「うーん・・・所持品からして銃使いなんだろ?ナビ・・・」の銃つて物凄い旧式なのよ ね・・・」

ベッドの横の台の上から銃を取り上げる・・・

シンプルな作りのリボルバーである。

不思議な事に普通のリボルバーなら「スイングアウト弾倉振出式」か「トップブレイク中折れ式」、  
もしくは「フックドフレーム固定式」のどちらの方法でリロードするはずなのだが、  
このリボルバーは回転弾装部分が完全に固定されていて、リロードが出来ない。

理由は魔銃……簡単に言えば魔法と銃をあわせた物であるからである。

回転弾装内に魔法を使って弾丸を精製し、それを撃ち出すタイプの銃である。

ミラーズ 「それにこの銃……壊れて……とまではいかないけど、

相當酷使したのか弾装部分がボロボロね……使えない事も無いけど……

これ、貴方の物のはずよ？」

行き成りミラーズに銃を投げられたので、心中では慌てそれをとらうとするが……

・・・その銃はすんなりと名無しの手に収まった・・・

名無し 「あれ？」

その銃を持った時一瞬何かがフラッシュバックした・・・

しかし、そのフラッシュバックが何かは良くわからなかつた・・・  
一瞬見えた光景は・・・真つ赤な視界の中・・・燃え盛る炎の中に  
背に膜の張つた翼を広げた・・・

悪魔の様な・・・逆光で顔は見えなかつたが、影のみでそんな感じ  
に見えた・・・

ミラーーズ 「大丈夫？銃を握り締めて・・・何か思い出した？」

考え込んでいる間にミラーーズがこちらを覗き込んでいた・・・

名無し 「え・・・ええ、何か見えた気がしました・・・」

自分の手の中の銃を知らず知らずの内に弄んでいた・・・

ミラーーズ 「それは名無しの物で正解か・・・使い込まれてる銃  
ね、旧式だけど」

自分の手の中に納まつてゐる銃はまるで自分の体の延長であるかの  
ようだ・・・

ぐるぐると手で弄んでいると誰かやつてきた。

？？？ 「おつ、目が覚めたか・・・で、どうだ？」

やつて来たのは大剣を背中に担いだ青年と自身の身長よりも長い杖  
を背に背負つた少女であった・・・

「なつー?」

現れた少女は、最後に記憶の中で見た少女にそっくりだった。

## 第三話 断片的

大規模都市・・・元々はそう呼ばれていた所も今ではこう呼ばれる  
ロストシティ  
「廃都市」と・・・

医療室にやつてきた青年はクルシス、少女はスイレンといつらしこ。  
・

クルシス 「状態は？起きてるって事は悪くは無いと思つが・・・  
・」

ミラーズ 「えつと・・・まあ、アレねスイレンと同じような  
感じ記憶が飛んでる」

先程メモを取つていた何かの紙を確認しつつ説明を始める。

ミラーズ 「まず身体的外傷は存在しない・・・まあ、無傷つ  
て事ね

聞いた話だと高い所から川に落ちたみたいだけ  
れども・・・

とりあえず、状況はスイレンと同じ感じね

ミラーズはおでこに手を当てて空・・・まあ、天井だが・・・を見  
上げてブツブツと何かを呟き始めた。

スイレン 「こんこちは・・・

スイレンは見た感じ元気で活発そうなイメージだが、今は表情は暗

い・・・

自分と同じ記憶喪失・・・とつあえずおぼろげな記憶の中にスイセ  
ンが居た事を話すか・・・

名無し 「あの・・・」

口を開くと真っ先に反応したのはクルシスであった。

クルシス 「どうした? 何か思い出したか?」

期待の眼差しでこちらを見てくれる・・・

名無し 「いえ・・・やつこつ訳では・・・」

期待に答えられそうに無いのでとつあえず謝罪しておぐ。

クルシス 「そつか・・・」

あからさまにがっかりしている・・・とつあえず、完全に期待外れ  
とつ訳でもないとと思う・・・

名無し 「とつあえず・・・えつと・・・スイレンさん・・・  
・でしたっけ?・・・

先程ほんの少し覚えている記憶で確かかどうか  
わからないのですが・・・

落ちていた少女が居て・・・  
崖・・・からかどうかは知りませんが、一緒に

その少女がスイセンさんに似てるんですけど・・・

瓜二つで・・・

スイレン 「…………」

ガシイツと、きなり少女が両肩を掴んできた……

スイレン 「私の事知ってるのー?私は誰ー?」

ガックンガックンと揺さ振られて、少しひっくりして途切れ途切れに言葉を紡ぐ……

名無し 「おぼろげ、なので、よく、わから……」

ミーラーズ 「スイレン、落ち着きなさい」

少々強引にミーラーズがスイレンを引き剥がす……

クルシス 「大丈夫か?……とりあえずその話を良く聞くか  
せてくれ」

名無し 「えと……その少女と一緒になつて落下して……

でも、水面に叩きつけられた時にまだその少女  
は居なくて……」

おぼろげな記憶を手繰り寄せて必死になり説明をするが、

「それでもおぼろげで詳しく述べて説明できない……

名無し 「それで……」

ミラーズ 「もう良いわよ・・・とりあえずスイセンと名無しが記憶喪失前に知り合いだったらしいってのがわかつただけで十分ね・・・

名無しとスイセンはこれから一緒に行動しなさい、もしかしたら記憶が回復するかもしれないからね」

スイレン 「はい・・・わかりました・・・

名無し 「えと・・・はい・・・」

とりあえずスイセンと言つ少女と行動を共にすると言つことになつた・・・

ミラーズ 「じゃ、名無しの案内はスイセンとクルシスに任せるわ」

ミラーズはそういうと部屋を出て行つた・・・

クルシス 「んあー・・・ああ、ここは施設について説明・・・の前にここがどういうところか

わかるか?記憶喪失でそういう事まで忘れてるつてのは笑えないからな」

クルシスは名無しとスイレンの二人に話しかけてきているらしい・・・

スイレン 「すいません・・・わからないです・・・」

名無し 「俺も・・・わからないです・・・」

記憶の中を探るが・・・記憶の中に「魔術結社」と「地下都市」と  
言つた語は出てこなかつた・・・

クルシス 「あー・・・説明・・・まあ、ここで座つて話す  
より、実際に設備を回りながら説明  
した方が効率がいいな・・・よし、名無しは歩  
けるな?」

名無し 「はい」

クルシス 「じゃ、しつかり着いてこいよ」

名無しはスイレンと共に「魔術結社」のギルドのある、

小型地下都市 「シャドウマジックシティ  
影潜魔法都市」と言つて、を案内しても  
らう事になつた。

## 第四話 小型地下都市

小型地下都市 「シャドウマジックシティ影潜魔法都市」・・・収容可能人数は5～6万人。

生活に必要な設備が整えられている地下都市である。

現在の人口は236人・・・名無しを含めると237人だそうだ。

「マジックキャバル魔術結社」ギルドの合計人数は132人である、

内、付近の魔物を討伐したり、廃都市の調査をしている戦闘部隊が68人、

残りの64人は都市内部に存在する大型コンピューターから

まだ何とか生きている人工衛星を使って他の都市のギルドと連携をとる為に通信を担当したり、

ギルドの物資を振り分けたり等の雑用を引き受けている援護部隊である。

都市に居る人の内、36人が獣人である。

獣人の半数はギルドの戦闘部隊に所属している。

ギルドに属さないで街で暮している人々は市民と呼ばれている。

クルシスの説明を一つ一つまとめていく・・・

都市の内部 と言つても基本的な設備のみ を回つて、説明してくれていた。

そして、現在位置は都市内部のギルド本部にあるギルド員の憩いの場のカフェである。

そこで、現在位置は都市内部のギルド本部にあるギルド員の憩いの場のカフェである。

クルシス 「 そりいえば自己紹介してねえな・・・」

俺はクルシスだ、見ての通り戦闘部隊所属の大剣使いだ」

右手を差し出されたのでとりあえずこちらの右手を差し出して、握手を交わす。

名無し 「俺は・・・」

自分も自己紹介をしようとして口を開くが・・・何も思い出せないのでどんな

自己紹介したら良いのかわからず口を開くが・・・スイレンも少し困っているようだ・・・

クルシス 「ああ・・・すまん、記憶喪失なんだよな・・・わりい」

つい口が滑つてしまつたらしい・・・

クルシス

「とにかくで、名無しはこれからどうするんだ？」

今の雰囲気を変えようとクルシスが話題をえてきたのでそれに乗ることにする。

名無し 「わからないです・・・」

新しい話題に食いついたのはいいが、なんて答えていいのかわからない。

クルシス 「あーまあ、そうだよな、記憶喪失でこれからどうするかなんてさ

まあ、スイレンみたいにギルドに入るのもいい

いと悪いぞ？」

名無し 「ギルド・・・？」

ギルドに入る・・・確かにそれはいいかも知れない・・・

記憶喪失で・・・薄つすらと残る記憶にはスイレンと良く似た少女が居て・・・

スイレンも記憶喪失で・・・ギルドに入つていろいろしい・・・

だつたら自分もギルドに入るのが良いのではないのだろうか？

クルシス 「無理にとは言わないな、こここの都市の内部は安全だからな

でもな、お前は武器を持つていただろう？田

式のリボルバー・・・

確か名称はF.O.8-10だったか?」

クルシスの言つ通りで、名無しはリボルバーを持っている。

正確には自分の物かわからないが、握つてみた感じはまるで自分の腕の延長の様な感じで、しつかりと狙つて撃てば百発百中するのでは?

と言つぐらーに自然な感じな握り具合であった。

そのリボルバーをバッグから取り出す。

名無しはクルシスに渡されたこの街での衣服に着替えていて、

その時に一緒になつて渡されたバッグの中に自分の所持品・・・

持つていたのは旧式魔銃F.O.8-10だけであるが・・・

そのリボルバーを取り出す・・・

スイレン 「その銃・・・」

と、スイレンが横から銃を取つて観察し始める・・・

名無し 「えつと・・・」

その様子を眺める・・・特に乱暴に扱つたりせず、「丁寧に扱つているので問題はないと思つた。

クルシス

「ん~・・・とりあえず、射的場に行くか・・・

」

椅子から立ち上るとクルシスが建物の奥を指差して言った。

クルシス  
つてみろよ  
しれないからよ

「あつちに射的場があるからよ、そこで銃を使

クルシスはクルシスなりに氣を利かしてくれているようだ・・・  
クルシスの氣遣いを無駄にする訳にはいかないし、  
この銃を一度使ってみたかったので射的場に行く事にした。

スイレン  
「・・・・・・・

スイレンは銃を返した後も無言であった。

## 第五話 射撃場

Fog-10とは、安定した魔導銃のベストセラーを作り出した会社が開発した、

変り種の魔導銃である。正式名称「Fog-10 前装式回転式拳銃」

シングルアクションで形状はコルト・シングル・アクション・アーミーと良く似ている。

装弾数は六発、使用最高魔法レベル20、生産数は不明。

特徴は使用者の拳銃使用能力と魔法使用能力に大きく左右される性能である、

そのため取り扱いが難しく、価格も他の魔導銃に比べると高い。

これまで初心者が簡単に扱うことの出来る安定性と信頼性、その上安値と言う安定した魔導銃を作り出していた会社が、何故この様な魔導銃を作り出したかは不明であるが、

「とある物好きの特別注文品であったのでは?」等と噂されている。

その関係か「魔導銃取り扱いの上級者を名乗るにはこの銃を使いこなせなければいけない」と言っていた銃である。

現在では魔銃と言つが、魔法を利用する銃の事を開発当初は魔導銃と言つた。

F 09 - 10を携帯するためのガンベルトを装備して、そこにF 09 - 10を収納し、

射撃場の距離15～35mに設定された100m四方の射撃場の中に立つ。

射的場でやった時は30発中18発命中と、全く当たらなかつたが、

クルシスが「実際の戦場ならもっと良い成績が出るんじゃないかな？」  
俺も実際戦場の方が強いからな」

と言つてくれて、ここに射撃場につれてこられたのである。

「この射撃場は、射撃者を中心にして全方向に的が現れる＆

風景を立体映像として映し出して、実際の戦場の様な感じにするとが出来るのである。

その何もない100m四方の部屋の中心部の射撃者が立つ場所に名無しは立っていた・・・

クルシス 「おう、準備は良いなー、命中精度と的中精度、  
それと

射撃速度も測るからなー、落ち着いていけよ

見た感じお前ならできるからなー」

射撃場に設置されたスピーカーから響くクルシスの声・・・

クルシス 「んじゃー、アナウンスの後に開始だからなー頑張れよ」

ブツンッとスピーカーの切り替わる音・・・

アナウンス 「これより立体射撃場での射撃訓練を行います。」

無機質な女性の声が響き渡る

アナウンス 「訓練レベル1、訓練場所は森です。射撃レベルが高ければ高い程訓練レベルが上昇します。落ち着いて射撃しましょう。開始します」

ブウンッと辺りの何もない真っ白の部屋の風景が変わり、木々の生い茂る薄暗い森に変わった・・・

その瞬間に体がガチガチになってしまい自分の意思では動かせない・・・

これは訓練の一部であり、立体映像であり、自分は絶対に安全であると言う事を

頭では理解していても、心が竦んでしまう・・・

ガサリツと近くの木々の揺れる音・・・心の中の自分はビクッとき上がる・・・しかし、体は違った・・・

音のした方向が情報として頭の中に滑り込んでくる・・・

その方向を向く・・・銃をガンベルトから引き抜いて魔力を操り、  
弾丸を弾倉の中に精製する・・・そして、撃鉄を引き起こし、射撃  
体勢に入る・・・

ガサガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・

何か黒い影が飛び出してきたが、それが何かを確認する前に引き金  
を引く・・・

しかし、頭の中にはその敵の情報がすぐさま浮かび上がっていた・・・  
そして、何処が急所なのか・・・どうすれば一撃で仕留められるの  
か・・・

そんな情報が浮かび上がった直後に体が勝手に動いていた・・・

発砲音・・・茂みの向こうで、何かが倒れる音・・・

アナウンス 「命中しました。」

敵に命中させた場合が「命中」、急所に命中させた場合が「的中」、  
一撃で仕留めた場合が「必中」。

アナウンス 「訓練レベルを上昇させます、レベルは3です」

アナウンスが終る・・・と、ガサリガサリと草木が揺れる音が複数の方向から・・・

敵の居場所がまるで手に取る様に頭の中に浮かび、対処法も浮かぶ・・・

何も慌てる事とも無く空いている手の親指と小指で掌を扇ぐよつこコッキングし連續射撃を行う

体勢をとる・・・の動作をファニングと言つ。

ガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・ガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・ガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・

飛び出してきた・・・敵を瞬間で排除する。

敵の急所と敵がどの様に飛び出してくるか、何処を狙えれば良いか・・・全てが頭の中に浮かび、

自分が何かを考える前に体が勝手に動いて、敵を排除していた・・・

名無し 「え・・・これが・・・俺?」

戸惑う間も無く、次のレベルの訓練が始まる。

## 第六話 正確無比

バーンツバーンツバーンツ・・・

連續での発砲音・・・画面に映る名無しは戦場慣れした動きをしている・・・

まるで獲物を狙う猛禽類の様に見られただけで切断させそつと目をしている・・・

クルシス 「すげえ・・・記録更新しそうだぞ・・・」

現在の訓練レベルは最高レベルの20である・・・

訓練レベル15あれば十分な実力と言われる。自分は訓練レベル18が限界であった・・・

大剣使いと銃師では感覚が違うかもしれないが・・・

それでもこのレベルに到達して殆どの的を命中させるのは凄い・・・  
ここは射撃場の制御室である。入り口以外の方向に機械がびっしりと並んでいて、

複数のディスプレイに射撃場内部での訓練の様子がリアルタイムで表示されている。

スイレンは後ろでディスプレイの一つをジッと見つめている・・・

クルシス 「そろそろ訓練終了だな・・・そろそろ魔力切れになるかもだからな」

パネルを操作して訓練終了の合図を送りうつする・・・

アナウンス 「訓練は終了です。訓練は終了です。元のフィールドに戻します。

射撃戦績はランクEXです。命中率100%、的中率97.38%、命中率90.27%、

平均反応速度2.8秒、最速1.11秒です。」

アナウンスが終了し、訓練が終った・・・

クルシス 「ふう・・・すげえな、こここのギルドの誰よりも強いじゃねえか・・・」

こここのギルドでの銃師の最高記録は命中率100%、的中率34.73%、命中率13.02%である。

それを圧倒的に上回る戦績である・・・

クルシス 「この戦績なら・・・」

今の戦績と立ち回りを見れば相当な実力の持ち主なのはわかつた・・・

そして、これだけの実力なら、データバンクに記録が残っているかもしれない・・・

名無しは射撃場の中心部分に立ちすくしている・・・

クルシス 「ああー・・・しゃーねえ、行くか」

名無しを迎えて行く為に射撃場に向かう・・・

スイレン 「えと・・・はい」

その後をスイレンが追つてくる。

射撃場の中心で魔銃を握り締めて呆然と立ち竦む・・・

自分がこんなに強かつたなんて・・・

それ以前にどの敵に対しても瞬間的な対処法が思いつき、それを実行していた・・・

一瞬何かの悪い夢か何かでは無いかと疑うが・・・

それは紛れも無く現実であり・・・右手に握った銃の重みが現実だと知らしめてきた・・・

クルシス 「おーい、大丈夫かー？」

肩を叩かれ、ビクッとした後に、ようやくすぐ近くまで

クルシスとスイレンがやつてきていた事に気がついた。

クルシス 「何か思い出したか？」

「ちひを氣遣う様に声をかけてくる・・・

名無し 「いえ・・・スイマセン」

思い出した事は何も無い・・・わかつた事ならある・・・

多分・・・自分は戦闘を経験した事がある・・・

意識としては怯んでいても、体としては怯む所か何だが慣れ親しんだ場所に居る様であった・・・

自分が誰なのか・・・そこがとても気になる・・・

クルシス 「何故謝る?まあ、良いけどな、それよりお前凄いな

あの戦績だ、相当な実力者だぜ?データバンクに問い合わせれば

お前が何処の誰だかわかるかもしねえ」

名無し 「本当ですか!」

自分の事が判るかもしない・・・それを聞いて沈んでいた気持ちが浮き上がる・・・

クルシス 「スイレンと名無しが知り合いだつたなら、名無しに関して何かわかれば

スイレンに関しても何かわかるかもしねえ

ぞ。」

氣を利かしてスイレンにも声をかけるが肝心のスイレンは上の空で

ある・・・

スイレン 「・・・・・」

クルシス 「スイレン?スイレン、ビリした?」

スイレン 「え?ああ、何にも無いです」

一瞬だけ名無しの顔を見た後にすぐに何事も無かつたかの様に振舞う・・・

クルシス 「そうか・・・無理はするなよ、じゃデータバンクを調べに行こ!」

名無し 「はい」

スイレン 「わかったわ」

握り締めていたF0g-10をガンベルトにしまおつとする・・・

手が硬直しており、引き剥がすのに少しだけ苦労した。

そして記録を管理する為の 大型コンピューターの管理室に向かう。

## 第七話 記録管理室

大型コンピューターの管理室は関係者以外立ち入り禁止らしい・・・

関係者と言つのはデータの管理を受け持つ支援関係の仕事についているギルド員の中の

資格を持つた者だけらしい・・・

その為、データバンクへの接続は直接は出来ず、管理者に頼んでバンクにアクセスしてもらい、

必要なデータを引き出してきて閲覧するだけらしい・・・

そして、その受付カウンターでクルシスと管理者の女性が揉めている・・・

クルシス 「こ」の戦績だぞ！無いなんて事があるわけねえぞ！」

ドンッとカウンターを両手で叩き、相手に唾を欠きかける勢いで怒鳴りつける。

女性 「無い物は無いです。」

相手の方は全く相手にせずに落ち着いた対応をしている・・・

クルシス 「この実力だぞ？今時個人で生き残るのは不可能だ、だ

からどこかのギルドに加入して  
はすだ、だからデータバンクのどこかに残つてゐるは  
ずだ！」

クルシスは引き下がるつもりは無いらしい・・・

女性 「・・・はあ・・・貴方はいつも強引ですね、そんなん  
じゃモテませんよ？」

クルシス 「うぐつ・・・」

痛いところを突かれたのかクルシスは黙り込む・・・

スイレン 「すいません、本当に無いですか？本の小さな事でも良  
いんです、何か合つたら・・・」

スイレンが必死になつて頬み込む。と、女性が少し困つた顔をした  
後に溜息をついて口を開いた。

女性 「無い事はないのよね・・・」

クルシス 「あるじゃねえか！」

クルシスが先程のお返しとばかりに女性を丸め込もうとするが・・・

女性 「人の話は最後まで聞きなさい、だからいつまで経つて  
も訓練所教官止まりなのよ」

クルシス 「うぐつ・・・」

また痛いところを突かれて黙り込んでしまった。

女性 「それでね、その情報っていうのが、本当にくだらないと言つかりえない記録だから・・・それに、そつとう古い物なのよ」

スイレン 「その情報をくださー！」

スイレンはそれでも情報を欲した・・・

女性 「だつたら、端末を貸してくれる？」

スイレン 「はー」

スイレンは自分のポーチの中から小型の通信端末の様な物を取り出して女性に渡した。

女性 「概要に關しては今説明するわね」

そう言つると女性がその情報 記録に關して説明を始めた。

まず射撃場の名無しの得点と煮たような記録に關して、これは五十年前のこの都市に

ギルドが開設された直後辺りの記録。

得点は「命中率100%、的中率98・97%、命中率98・23%」であった。

そしてその記録を出したのが・・・リュウと書かれた少年であったらしい。

そのリュウに関しての個人情報の記録は残っていない。

ただ、記録の中の日記の部分にその名が登場していたらしい。

・記録重要度D 記録番号D1-83

日付：失暦 一二一七年 一月 二八日 記録者：決戦唯一の生き残り

運命を決するはずの戦闘は終った。

俺一人を残して他のメンバーは全滅してしまった・・・

この都市は自律防衛システムによって消滅する事は無いだろ？・・・

しかし・・・この世界を蝕む根源を絶つ事は出来なくなってしまった・・・

私の役目は仲間達が今すぐ帰つても良い様にこの都市で帰りを待ち続けるだけである。

そして、リュウとルイの帰りを私は待つ必要がある。

リュウは約束をした「俺は必ず帰る」と・・・

だから、私はこの都市で仲間の そしてリュウとルイの帰りを待つ

これが記録の全てであるらしい・・・

この都市は五十三年前に大々的に起きた魔王と名乗る者の討伐作戦の重要な拠点であった・・・

その作戦は決行された・・・

元々、この都市の近く・・・と言つても相当遠いが、

そこに魔王を召喚する者が住まつ場所があつた・・・

まるでRPGゲームに登場する魔王城そのまんまの城が構えていた・・・

そこに、こここの都市に集まつた精銳達が突撃していったのである。

人数は合計で200人弱・・・武装は完璧。これで魔王を討伐できれば、

この荒廃の時代が終ると信じて突撃していった・・・

しかし、その部隊は一人を残して全滅・・・

その生き残りの一人が記した日記らしい・・・

その日記に「リュウ」と書かれていたと同様に同じ戦績を出した少年が居たらしい・・・

しかし、五十二年も前の話なので、名無しとは無関係である・・・

しかし、とても気になつた・・・そして、情報管理の女性に話を聞くと、

この日記を記した人はまだ生きていると言つ・・・

毎日、今は使われていなはずの第一ゲートで、仲間の帰りを待つ  
ているらしい・・・

クルシスがその人物の所まで案内してくれるそうだ・・・

## 第八話 過去の記録

クルシスの案内でやつてきたのはゲート管理システムが破壊され、ゲートとしては二十年前から使われては居ない第一ゲート・・・。使用されているゲートなら、光線防壁レーザーウォールでゲートを閉じているが、今はもう使われていない為、強化合金による隔壁が降りている。その隔壁の前の所に杖をついて佇む老人が居る・・・老人は隔壁を見ていた。

そんな老人にクルシスが声をかけた。

クルシス 「おう、爺さん今日は帰つてきそうか？」

老人 「ふむ・・・いつか帰つてくるわい・・・何か用か？」

老人はこちらを見ずに、隔壁を見ながら答えた・・・

クルシス 「過去の射撃場での最高記録に関して少しな・・・」

老人 「最高記録？リュウの記録がどうした？」

どうやら老人はこちらを見る気が無いらしい・・・

クルシス 「いやあ・・・それと同じ記録を出す奴が居るんだが・・・」

老人 「何！？」

その時になつてやつと老人はクルシスたちの方を見た・・・

クルシス 「そいつが記憶喪失らしくてな、まさかとは思うが・・・

つて、話聞いてるか？」

老人 「リュウ・・・ルイ・・・」

その老人はクルシスの話なんか聞いていなかつた・・・

名無しとスイレンの方を見て驚いた顔をしていた。

クルシス 「んあ？」

名無し 「えつと・・・」

スイレン 「・・・？」

老人 「リュウにルイじゃないか、やつと帰つてきたのか・・・」

老人は名無しとスイレンを懐かしそうに眺めながらそんな事を言った・・・

名無し 「俺を知つてるんですか？」

老人 「知つてゐるも何も一緒に魔王討伐に参加した仲じやぞ・・・」

スイレン 「魔王討伐作戦は五十三年前でしよう?」

クルシス 「その前に爺はいつこいつらと出会つたんだよ」

老人 「五十三年前、魔王討伐作戦決行の一日前じゃ」

クルシス 「・・・そのときに出会つたリュウとルイって奴にこいつら一人がそつくりだと?」

老人 「そつくりも何も同一人物じやろ?」

クルシス 「こいつらは記憶喪失なんだよ・・・と言うか、こいつらが五十三年前のリュウとルイって奴と同一人物つてのはありえねえだろ?」

スイレン 「はあ・・・」

スイレンが思いつきり溜息をついた・・・

自分と関係のない話つぽいので落胆したのであるつ。

老人 「うむ・・・とりあえずリュウに渡したい物があるのじや」

老人はそう言うとバッグから何かそこそこ大きい物を取り出し差し出してきた・・・

名無し

「魔導銃……」

クルシス 「魔銃だな……見た事の無い形式だが……どこの設計だ？」

老人が取り出したのは簡素なつくりの魔導銃であった。

片手で取り扱う風には見えない感じの銃である。

銃身が長く、遠距離からの狙撃を行うのに適している形状をしている……

よく見ると光学標準器スコープが付属している。

老人 「おぬし……リュウが戦場に忘れていった銃じや」

名無し 「戦場？」

老人 「魔王城じや」

スイレン 「そこに行けば何かわかるかも……」

クルシス 「んあ……クエストで旧魔王城の簡単な奴あつたかなあ……無かつたら探索で……」

老人からその魔導銃を受け取つて、それを背中に背負つた。

名無し 「ありがとうございます」

老人 「お礼なぞいらぬわ、それよりクルシスよ、嫌な予感がするわい・・・」

「行くなら注意するのじやぞ」

クルシス 「ああ、わかつたぜ、じやあな」

老人 「ふむ・・・わしは少し寝るかのう・・・」

老人とはそこで別れた。

その後、クエストカウンターで手続きを済ませ、

クルシス、名無し、スイレン、ミラーズの4人で旧魔王城の探索に向かった。

## 第九話 旧魔王城

古き時代の中世の城を思わせるつくりの大きなレンガで出来た建築物・・・

今は使われる事も無く、大きな戦闘があつたのかとこりどいろに色々な痕がある・・・

その城は高い山の上に建っていた・・・

城の入り口側はなだらかな斜面が続いているが、

反対側は切り立つた崖であった・・・

崖の下のほうには、川が流れていた。

その旧魔王城は王座があるべき所は何か大きな爆発でもあつたのか、

崩れ去っていた・・・王座の後ろの壁は消し飛ばされていて、

その王墓のすぐ後ろの六からは切り立つた崖が確認できた・・・

戦場であつた事を思わせるような爆発痕等が数箇所残つていたが、

五十年もの時を経て、殆どの物は腐敗なり劣化なりして確認できなかつた・・・

その城の入り口の大広間を見たときに一瞬だけフラッシュバックが

見えた・・・

燃え盛る炎の中・・・押し寄せる魔物の群れ・・・そこに切り込む肩を並べた仲間達・・・

後ろから戦車が続き・・・戦車の砲口から電撃光線スタンレーが発射され・・・

敵陣の中央部分の大多数の魔物が消し飛ぶ・・・

横に居た二十代後半の青年がこちらに何かを叫ぶ・・・

そして、自分は敵陣に出来た穴から奥に進む・・・その後を少女がついて来る

そんなフラッシュバックだつた・・・その光景の中で見覚えのある物が目の前に佇んでいた・・・

砲口を天に向け・・・地面に車体がめり込んだ戦車である・・・

旧魔王城に来るのに受けたクエストは「哨戒」であった・・・

近頃、ここに辺りで中型～大型の魔物の目撃情報が多数寄せられた為、

旧魔王城の辺りを哨戒して、中型の魔物が居るのであれば討伐。

大型の魔物が確認されたのであれば正式な依頼として数十人でチー

ムを組んで討伐すると並んで、

前調査為にやつてきたのである。

クエスト人数は最高6名だった。

予定通りに名無し、スイレン、クルシス、ミラーズの4人で調査に向かった。

旧魔王城につくまでは特に魔物と出会つ事も無く、問題は何も起きた。

旧魔王城についても特に小型の魔物とも出会つ事も無かつた為、

記憶の手がかりになりそうな物を手分けして探しているのである。

そこで、名無しは入り口の大地に頓挫する軽戦車を見つけたのである・・・

名無し 「・・・スタン・・・レイ・・・・」

スイレン 「どうしたの?」

その戦車に手を当てて考え事をしていたら、スイレンに声をかけられた・・・

名無し 「いや・・・何か思い出せるかと思つたんだが・・・

一瞬だけ何か見えた気がしたが・・・

良くわからなかつた・・・」

スイレン 「・・・」

スイレンはそのままアーラーズが居る方へと行つた・・・

クルシス 「うむ・・・」これは軽戦車だな・・・型番は知らんが・・・」

と、今度はクルシスが名無しの元にやつってきた。

クルシス 「何か思い出せやつか?」

名無し 「ここには来た事があると思つんですが・・・なんだか、じう・・・露がかかるつてる感じで・・・」

クルシス 「ここに来た事がある?・・・倒れてた河原は確か崖下の川の下流だよな?」

名無し 「そうなんですか?」

クルシス 「ああ・・・お前は記憶喪失だつたな・・・確かお前が倒れてた河原の上流がここに

当たると思つたが・・・何か関係あるのか?」

名無し 「まあ・・・わからないですね」

クルシス 「そつか・・・」

そつぱうとクルシスは沈黙し何かを思案し始めた・・・

名無しは名無しで自分の考えをまとめてみる事にした・・・

多分だが、自分はここに来た・・・あの老人が会つたと言つのは自分だ・・・

そして、ここで大きな戦いがあつた・・・その戦いに自分と・・・スイレンも加わつたのだろう。

そして、その戦いの最中・・・自分は・・・魔法に巻き込まれ時を越えた・・・のではないだろうか？

時空転移や時間転移の魔法は未だ開発されていないのでわからないが、

何らかの転移魔法の失敗によつて自分は五十三年の時を越えたのは?といつのが

現段階での名無しの考え方だ。

とはいゝ、転移魔法の失敗によつて時を越えると言つのは考えにくい・・・

転移魔法が失敗したのであれば、次元の裂け目の中を永遠と漂つているはずである・・・

考えて・・・考えて・・・思索を続けるが、特に思い出す事も無く・

奥に進んで王座についても、特に何も思い出せなかつた・・・

落胆しながら王座のある大きな部屋に入る・・・

クルシス 「ん・・・・何か音がしなかつたか?」

クルシスが何かに気がついたように辺りを見回す・・・

## 第十話 接敵

クルシスの一言で皆がそれぞれの獲物を掴み警戒態勢に入る、  
クルシスは大剣を、名無しはリボルバーを、スイレンは長杖を、  
ミラーズは短剣をそれぞれ手に取り構える。

前衛はクルシス、ミラーズの二名、後衛が名無しとスイレンである。

クルシス 「誰か居るな」

ミラーズ 「だね、そこの王座の後ろ、誰？」

王座のある大きな部屋、王座の後ろの壁はじつそりと消失している。  
その王座の入り口から死角になつてている場所から誰かが現れる・・・

「あはは〜・・・見つかっちゃったねえ・・・流石  
この時代最強の剣士さんだなあ〜」

現れたのは女の子であつた・・・ワンピースを着たさりさりの黒髪  
の10歳程の女の子・・・

まるでかくれんぼをしていて見つかったみたいな雰囲気であるが・・・

こんな所に一人で居る女の子・・・あからさまに怪しい・・・

いくらいに辺りの魔物が討伐されて減つていいとはいえ、

女の子一人で居るのは危険極まりない・・・イコールここに居るこの女の子は人間ではない・・・

魔物の中には完全に人間に擬態する物も居る・・・

大概、地下都市の外に居る武装していない人間は魔物の擬態である。

クルシス 「誰だお前・・・」

女の子 「ふうん・・・偉そうな剣士さんだなあ・・・まあ、いいけどねえ・・・」

貴方に用は無いの一だから黙つてくれるかな  
ー？」

その女の子は笑みを浮かべながら話しかけてくるが、目が笑っていない・・・

所属ギルドを言つのが普通・・・らしい

質問に対しても答えない・・・対外の場合には住まう都市名と自分の名、

だが、女の子はその質問を無視している・・・

女の子 「私はお兄ちゃんを迎えて来ただけだからねえ！」

その女の手と眼が合ひ……

名無し 「兄……？誰だお前……」

クルシス 「お前の知り合いか？」

クルシスが名無しに聞いてくるが、生憎と記憶喪失中なので覚えて  
いる訳がない。

女の子 「あるえ？ああ～そつか～今回のお兄ちゃんはまだ  
私の事しらないよね～」  
自己紹介からー？面倒くさいなあーもひ二十回  
田だよー？」

一人で何かを納得したように両手を打ち合わせてから、一〇一二〇笑  
顔で語りかけてくる……

女の子 「私はあー……あー」

と、女の子が右手を右側に突き出す……その右手が肘の辺りまで  
次元の裂け目に飲まれている……

女の子 「やつぱ自己紹介やめー、今回のお兄ちゃんが私の  
言つ事聞いてくれなかつたら

結局消しちゃうんだしー、言つ事を聞いてくれ  
るお兄ちゃんに自己紹介した方が

楽だよねー？何でこんな簡単な事に気が付かつ  
たんだるー？」

その女の子が右手を次元の裂け田から引き抜く その手には機関銃が

咄嗟にリボルバーを女の子に向け

ガギッ ガンツガラランツ・・・

手に持っていたはずのリボルバーは後ろの床に落ちる・・・

女の子 「流石お兄ちゃんだなあ、油断できなによ〜」

そつ良いながら女の子はいつの間にか左手に持っていた拳銃で名無しのリボルバーを打ち抜いたのであつた・・・

女の子 「やあー、話し合ひの時間だよー?はい、武器を床に置いてねー

変な動きをしたら次は頭を消し飛ばしちゃうからねー?」

片手で扱える風には見えない重厚な機関銃を片手で操りこじらりに向け・・・

まるで見た目相応の幼さを残した楽しげな声で忠告をしてきた・・・

ミハーツ 「話し合ひ?武器を突きつけて話し合ひだなんてねえ・・・それは脅迫って言うのよ?」

ミハーツが短剣をゆっくりと地面におきながら女の子をにらみつけ

る・・・

スイレンも足元に長杖を置く・・・ クルシスが大剣を床に置く・・・

女の子 「はあーい、良い子良い子～じゃー、お兄ちゃんは  
一緒に帰つてくれるー？」

次元の裂け目・・・ 数多くの道具等を持ち歩きたい時等に道具を保管しておくるための魔法・・・

次元倉庫ディメンションゲートは人間のみが使う事が出来るようになつて いる魔法だ・・・

イコール魔物ではない・・・ だが、人間でもないだろう・・・ じゃあ何なのだろう?

名無し 「帰る? 何処に?」

この場は落ち着いて相手から情報を聞き出るのが先決だ・・・

相手を刺激しないように質問をしてみる・・・

クルシスとミラーズは名無しの意図を悟つてくれたようで、黙つている・・・

スイレン 「名無しを知つて いるの! ねえ、教えて、私の事は  
知らない?」

スイレンは焦つて いるのか怒鳴りつけるように相手に質問をする・・・

女の子

「はあー・・・質問は受け付けないんだけどー?」

明らかに不機嫌になつてゐる、これは不味い。

## 第十一話 不意打ち

貴重な情報を求めて、スイレンは相手の様子を伺う事もせずに叫びかける。

スイレン 「お願いっ、私について知ってる事を教えて…」

向けられた銃口を意識しながらも横に居るスイレンを落ち着かせるために声をかけようとするが、

その前に女の子がスイレンの足元に向かって威嚇射撃を行っていた、

スイレン 「・・・・つ…！」

女の子 「黙れって言つてるのわからないかな？次は頭いくよ？」

その不機嫌な声色から次は無いと想つのが感じ取れる…

スイレンは余りの出来事に驚いて硬直してしまった。

女の子 「んー…帰るつて言つたらお母様の所に決まつてるじやん？」

先程の不機嫌な声色が完全に消えていた…まるで別人である。

今のは名無しの質問への回答だら…・・・お母様？

名無し

「お母様？母さん？俺の母さん！？」

女の子 「あれれ？反応がおかしいなー・・・今回のお兄ちゃんは何か変だよー？」

女の子は不思議そうにこちらを見る。

女の子 「あー、記憶喪失のばたあーんかあーーのばたあーんが一番面倒くさいなあー」

名無し 「パターン？何の話だ？」

女の子は左手に持っていた拳銃を弄びながらこちらを見て溜息をついた。

女の子 「じゃー説明するねえー」

まるで昔話を語るような調子で、淡々と語つていく内容は意味のわからないものだった。

貴方は大罪を犯しました。それはとても重い罪でした。産みの親である母親を裏切る大罪でした。

お母様は大いにお怒りになりました。それと同時にお母様は大切に育てた子供に裏切られ、

心に大きな傷を負つてしましました。そして貴方は家を飛び出していました。

お母様は貴方がいつまで経つても戻つてこないので、心配になつて兄弟に貴方を探させました。

私は貴方を探している兄弟の内の一人です。

淡々と語る女の子は語り終えた後にこちらを見る。

女の子 「判つて貰えましたか？」

その瞳はまるでガラス玉のように無機質でこちらを威圧してきていた。

名無し 「俺が犯した大罪とは？」

女の子 「それは、貴方が人間を愛してしまつた事です。」

名無し 「人間を愛する？」

女の子 「そう、人間を愛してしまつた、そして人間を庇おうとしたのです」

名無し 「意味がわからな」ぞ…」

女の子の口から発せられる言葉はまるで機械から発せられる無機質な音のようだった。

女の子 「私の説明で理解していただけないのですね？」

すると女の子の瞳の色が変わった・・・無機質なガラス玉の瞳から

女の子らしい生き生きした瞳になる

女の子 「もう今回は最初から諦めちゃおう、どうせ次の世界に行けばお兄ちゃんなんて居る訳だしさー、よし、そつと決まつたらこのお兄ちゃんの排除かなー」

いきなり女の子は戸口でそう言つと可愛らしい笑顔を浮かべ ちらちらを見る

女の子 「これで何度もかな? お兄ちゃんを排除するのは」

そう言うと機関銃の引き金を引かんと ガツキーンッ

ミラーズ 「何か知らないけど、貴方を捕獲するわね」

女の子 「・・・・・」

ミラーズがバックから別の短剣を取り出し、高速で投げつけ、銃口を逸らした。

その隙にクルシスが大剣を拾つて女の子に接近を試みる。

名無しもその隙にリボルバーを回収、スイレンが長杖を掴み、魔法の詠唱に入る。

ミラーズは最初に床に置いた短剣を回収し投擲した短剣を回収に向かう。

その間に女の子が機関銃をクルシスに向けて発砲。

クルシスが大剣を盾のよつに使い機関銃の攻撃を防ぐ。

その間にリボルバーに装填されていた弾丸の種類を高速で変える。

電撃弾スタンバレッダのレベル一である。相手を痺れさせる程度の威力の弾丸。殺傷能力は無い。

その弾丸に装填しなおした時にはミラーズが投擲した短剣を回収し、両手に短剣を持って

女の子に攻撃を仕掛けていた。と、視界の端っこにクルシスがいた。ドゴッと言づ音・・・

横に立つていたはずのスイレンの姿が消えていて、

女の子に切りかかっていたはずのミラーズも消えていた・・・

背後の壁に何かがぶつかる音が響いた・・・

スイレンが居た場所には詠唱中の魔方陣だけが不自然にその場に魔法の痕跡を残していた・・・

女の子 「貴方達じや私に勝てないよ?」

先程の反撃が一転、またしても追い詰められてしまった、

女の子は余裕そうな顔でこちらを見ている、

先程の一手、ミラーズの攻撃は完全に不意打ちのはずだったのに、

完璧に対処してきた。

クルシスを空氣砲ヒル-シヨウトで吹き飛ばし、ミラー<sup>ズ</sup>を蹴り飛ばしてスイレンにぶち当てる。

普通の人間が出来る事ではない・・・

奇襲を全て回避され、銃口を向けられる。

こちらが何らかの行動を起こす前に確実にその銃が火を噴いて自分の体を粉々に消し飛ばすのが情報として具体的な数値と共に頭の中に表示された。

「お兄ちゃん程の性能を持つてればわかるよね？勝てないのは」

無邪気な笑顔と人間なんぞ一瞬で肉塊に変えてしまう凶悪な銃口を  
向けられ

硬直してしまう・・・クルシスもミラーズもスイレンも誰も援護に入れない・・・

頭の中にはありとあらゆるパターンの抵抗方法が示され……

その内の最も被害の少ない抵抗方法を体が勝手にとる。・・・

瞬間で背負っていた長銃を取り、自分の足元に向ける、その行動を見逃さずに女の子は引き金を引く。

ギュイイイインツ・・・まるでチェーンソーの様な銃声・・・その銃声に混じつて甲高い銃声・・・

長銃から射出された弾丸は空気砲のレベル4、人間の体を簡単に吹

き飛ばす程の

魔法的風を引き起<sup>ハ</sup>す弾丸である。

それの効果が瞬間で発動し、自分の体が風によつて吹き飛ばされた。  
・

一瞬前まで名無しが立つていた場所に数十発の弾丸がめり込む。

背後の壁に上手く両足で着地して、衝撃を完璧に消して、地面に音も無く着地する。

長銃に装填された弾丸を変化させる。

エアーショット  
空気砲の<sup>ディープマジック</sup>レバ<sup>4</sup>から吸魔弾に変化、

女の子が銃口を立ち上がろうとしていたクルシスに向けた

この動きは完璧に計算できていた、吸魔弾をクルシスの前の地面に

向かつて撃ち出す、魔法を無力化する防壁がクルシスを囲むように作り出される。

そこに女の子の放つた弾丸が何発も当たるが、

吸魔力場によつて魔力を吸収され、弾丸は虚空へと消えていく、

女の子は舌打ちをすると、今度はリバースとスイレンの方向に銃口を向ける

その動きも計算の中に完璧に入っている、リボルバーを引き抜いて、

長銃を片手でミラーーズとスイレンの届く方向に向け、

リボルバーを、女の子の持つ機関銃へ向け、両方の引き金を同時に引く。

女の子 「つ！？」

長銃に装填されていたのは勿論、吸魔弾ディープマジックであり、魔弾を消滅させる。

リボルバーに装填されていたのは電撃弾スタンバレットの「▽1、相手を痺れさせる程度の効力しか持たない弾丸、その弾丸は見事に機関銃にヒット。

女の子自身を狙っていた場合、確実に回避されていたのだろう。

そこで、明らかに鋼鉄製の機関銃を狙つて、感電させたのである。女の子がビクンッと一瞬だけ体が反応した後に、その場にドサリッと倒れこむ、

その拍子に機関銃がガラランッと音を立てて転がった。

女の子 「あはは・・・今回のお兄ちゃんには負けちゃったか・・・まあ、良いけどね・・・

忘れたら駄目だよ“私達は貴方を消す”それがお母様の望みであるならね

女の子がそう言つと、辺りの風向きが変わる。

女の子 「最後に一言。過去を変えると未来が変わる。未来を変えても過去は変わらないけどね」

最後に目を開けていられないほどの強風が吹き荒れる

目を開けた時にはその女の子と機関銃はきえていた。

クルシス 「うう・・・なんだつたんだ・・・」

クルシスが大剣を杖のよつに使ってこちらに歩いてくる。

スイレン 「いたたた・・・」

ミラーズ 「あの子は新種の魔物かしりへとりあえずギルドに報告しておかなきやね」

スイレンとミラーズも少し遅れてやってくる。

クルシス 「人間の言葉を話せる、理解できるといつ辺りから最上位の魔物ではないか？」

最上位ともなれば魔法や魔銃を使えてもなんら不思議は無い、

まあ、こんな所で話しかけよりは都市に戻らうぜ。

ミラーズ 「賛成ね、名無しにも話を聞きたいし」

「

ミラーズとクルシス、スイレンの二名が名無しを見る。

名無し 「えつと？」

ミラーズ 「あれよ、あの戦闘慣れした戦い方、というか完璧に先読みしてたとしか思えない

戦い方よ、アレはどう考えても一般市民じゃないつて事はわかるわ、

その上、あの女の子が言つには“人間を愛した罪”とやらに關してもね

色々と判らない事まみれなのよ、そこいら辺に關して何か思い出した事、

どんな些細な事でも良いから都市についたら話なさい。」

名無し 「はい」

と、その時にドローンッと何かが崩れる音。

ミラーズ 「え？」

スイレン 「あそこ、城の裏手」

スイレンが指差す先には城の裏手の崖の下に広がる広大な森があつた。

そこの一角に砂煙が立ち上がっている所がある。

## 第十二話 単独行動

砂煙が立ち上がる場所を確認するが、やはり人間の肉眼での確認は不可能である。

クルシスが手を筒の様にして、その筒を覗き込むようにして、

砂煙が立ち上がる場所を見る。

手に魔力が宿っているので、多分遠見の魔法を使っている。

遠距離を確認するのに使われる初步的魔法である。

クルシス 「良く見えんぞ、何か大きな魔物が居るな」

ミラーズ 「魔物?」

必死で砂煙の上がる場所を見るが、

必死に目を凝らしても、確認できるのは砂煙が上がっているだけである。

と、体が勝手に動き、魔力を目に集め始める。そして、口が勝手に言葉をつむぐ。

名無し 「魔物名称、スラッシュ・スパイダー切裂蜘蛛

状況、15～16歳程のフル・クフーデ蝙蝠獸人の少年と10～11歳程のフル・クフーデ蝙蝠獸人の少女が

スラッシュ・スパイダーに襲われている。少年の武

装は短剣

少女の武装は

クルシス 「おい、お前……」

と、その台詞を半ば強引にクルシスが止める……

その場に居る全員が名無しに注目している。

名無し 「あれ……？」

しかし、名無し自身も今の自分の行動にびっくりしていた。

今のは、視野距離を魔力で強化して、あの戦場を確認し、

戦場の状況把握と情報伝達を高速で行ったのである……

名無し  
「少年と少女の救出、魔物の討伐をする  
脚力強化、直線距離1500メートル  
到着までの時間55秒、突撃する。」

いきなりだ……まるで自分の体が勝手に動いている感覚……

足に魔力を溜める。脚力の強化が完了し、リボルバーを手に持ち、

王座の後ろに空いた大穴に向かつて走り出す……

クルシス 「おい！何してや！」

ミリーズ 「ちよつー待ちなさい！」

スイレン 「うー！」

クルシス、ミラーズ、スイレンの三名は、名無しの急な行動にびっくりしていた、

その声を振り払うよつこ、大穴から外に飛び出す

飛び出した先は足場の無い崖

体は重力にしたがつて落ちていく・・・浮遊感・・・

後ろからクルシスとミラーズが何かを叫んでいるのが聞こえたが、体は言う事を聞かない・・・

体が勝手に動く・・・地面がどんどん近づいてくる・・・

右手に握っているリボルバーに装填された弾丸を変化・・・

瞬間で空気砲エアーショットレバ4に変化・・・

地面にぶつかる・・・いや、地面ではない、大きな川である・・・

そこにぶつかる寸前に右手に握ったリボルバーを地面に向け、発砲。

エアーショットの効力で空気が破裂する・・・そこに、自分の体が落ちる・・・

そのヒアーショットの効力で、着地の衝撃は完全に消滅する。

音もなく地面に着地し、そして瞬間で砂煙の立ち上がる森の一角へを走り出す・・・

森の中を疾走して、55秒足らずで目的地に到着。

目的地は森の一角の土煙が上かっている場所、

才々かなき僕され  
また振重が起る  
そして一燃が上がる

その先に少年と少女の姿がある。

少女の手を掴み必死で走って逃げている

その後を体長20メートル程の大蜘蛛が追いかけている。

大蜘蛛が一步を踏み出すたびに地面が振動し、木々がなき倒される。

大蜘蛛の歩みはあまり速いわけでもない、しかし人間の足で必死に走つても

一步一歩の進みの違いが、差が生まれるから逆に縮まってしまいます。

蝙蝠獣人 フルーフーデ 特有の翼を使って逃げれば良いものを、必死に走って逃げているせいで

フルーツフルーテ

もつすぐ追いつかれそうだ、手に持つリボルバーの弾薬を変化させる。

ファイアバレット  
火炎弾のLVSに、威力は最高値、鉄をも溶かす灼熱の爆炎を放つ  
弾丸。

背負つている長銃の弾丸を完全被覆鋼弾にする。

大蜘蛛は少年と少女に気を取られ、こちらに気がついた様子はない。

銃口を大蜘蛛の頭に向け、引き金を引く。勿論急所を狙い、  
動く大蜘蛛の動きも完璧に予測した上で射撃なので外れる訳がない。

その発砲音が辺りに響き渡る前に弾丸は蜘蛛の頭に吸い込まれ、

爆炎を上げる・・・爆発の衝撃が少年と少女をこけさせる。

急いで少年と少女のもとに近付こうとする

と、そこで頭を炎上させている大蜘蛛の背中がミシリと音を立てて  
裂け始めた・・・

名無し 「目標は雌個体であると判明、固体状態から子を宿した物と判明」

口から、その敵の情報を漏らしつつも、倒れて気絶している少年と少女のもとに向かう。

名無し 「大丈夫か？」

少年 「う・・・う・・・」

少年の方はうつすらと呻き声を上げるが、どうやら立ち上がりそう  
にない様だ・・・

少女は少し離れた場所に倒れている。

## 第十四話 切裂蜘蛛

少女の方の容態を見る為に近付く

と、その少女がいきなり立ち上がり、一呼吸で突っ込んできた、

咄嗟にリボルバーを引き抜き、引き金を引く

銃弾は少女に当たらず、少女は全体重を乗せ、名無しにタックルを  
しかけてきた。

名無し 「うぐう

少女に押し倒され、上に跨られる。

と、気がつけば少女は名無しが背負っていたはずの長銃を名無しに  
向けていた。

少女 「動かないで」

名無し 「まで、俺は

咄嗟に弁解をしようと口を開くが、銃口を首に押し当てられ、黙る  
しかない。

少女はゆっくりと名無しに銃口を向けながら少年に近付いていく。

少女 「大丈夫ですか」

こちらを油断無く睨み付けながら、少年に声をかける。

少年 「うう・・・ああ、大丈夫だ」

少年もゆっくりと立ち上がる、この状態ではできる事はない様なので

その一人を観察してみる事にした、

少年の方はくすんだ銀髪の野性味のあふれる感じの名無じと同い年かちょっと上の少年である。

とそこで気がつく、少年の蝙蝠獣人フルーフフーフ特有の翼膜の張られた翼はボロボロになっていた。

先程の爆炎に焼かれた訳でも、先ほどの衝撃で破れた訳でもない、どうやら、もとから使えるような状態ではないらしい。

少女の方も少年と同じくすんだ銀髪をしているが、整っている顔立ちから

美少女と呼んでも差し支えない10~11歳程の少女である。

少年はこちらをにらみつけ、傍らに落ちている名無じのリボルバーを見つけ、それを回収した。

少年 「何だお前、俺達に何のようだ」

少年は左手に短剣を持ち、右手でリボルバーを向けてきた。

名無し 「質問は別に良いが、出来れば銃を返してくれ」

とつあえず、刺激しない様に銃の返却を求めてみる。

少年 「質問に答えてくれ」

少年は一いちらを睨み付けてくるが、敵意を向けられてはいないうだ。

名無し 「魔物から助けた、これでは駄目か?」

少年と少女は一瞬啞然とした表情をした後に疑うような視線を一いちらに向けてきた。

少年 「本当か?」

名無し 「本當だ、それよりも早く銃を返してくれ」

流石に時間がやばくなってきたので、少年を急かす。

少年は悩んでいる様だ、時間がやばい、少々手荒な真似をしないと命に関わる。

一瞬でその場で立ち上がり、瞬間で少年に近付いて、その手から銃を奪い取る。

少年 「なつー?」

少女 「つー!」

少年も少女も突如の出来事に反応できなかつたらしい。

奪い取つたりボルバーの中の弾丸を確認する。

装填されているのは先程の火炎弾のファイアバレットファイアバレット L-5であった。

咄嗟に銃口を向け発砲する

と少女がこちらに銃口を向けなおし、引き金を引くとする

その銃身を掴み、銃口の先を別の方向に向ける。

名無し 「撃てっ！」

強引に銃口の向きを変えたせいで、銃を掴んでいた少女の体も強引に向きを変えられる。

バーンツと大きな銃声・・・こちらに近付いていた黒い影がビクリツと震えた後に

ゆっくりと地面に倒れる。

少女 「なつ・・・

少年 「何・・・」

名無しの放つた弾丸はちゃんと目標に命中し、爆炎を上げ、敵の大多数を吹き飛ばしていた。

そこで少年と少女は初めて自分達がどういう状況にあるのかを悟つた様だ。

名無しと少年と少女の三名は自分達を中心に半径10メートル程の

シールドウォール  
防壁と言つ魔法によつて守られてゐる空間の中に居るという事。

そして、その防壁の向こう側には数多くの子蜘蛛が居た。

防壁に攻撃を仕掛けっていた一部の子蜘蛛が爆炎に撒かれていた。

そして、先程少女が撃つたのはシールドを突破して接近していた子蜘蛛であった。

名無し　　「状況が判つたなら協力頼む、後2分しか防壁がもたない

　　その長銃は貸す、少しでも敵を倒してくれ」

有無を言わぬ態度で少年と少女に指示を出す。

先程の銃の持ち方から、少年は完全な素人、少女はそこそこ使える  
　　という程度であろう。

二人とも、短剣を所持しているが、短剣の持ち方から、

短剣の取り扱い方は少年は魔物と戦える程度、少女は人並みという  
　　ぐらいである。

ここは、少年に少女の護衛を、少女に銃による援護射撃をさせて、

自分が最前線に出て敵を引き付けつつ敵を一部排除後、この地域から撤退し、スイレン達と合流する・・・と、計算を終了する。

名無し 「お前は短剣で」このつの援護、お前は護衛されつつその長銃で援護射撃をしる」

少女 「了解」

少年 「わ・・・判った」

この状況で名無しの言つ事を聞く以外に良い案が思いつかないのか、

戸惑いつつも返事を返してくれる。

敵の数を数えつつ、溜息一つ。

## 第十五話 重症、死亡

バーンツバーンツとリボルバーの銃声、その銃声のすぐ後に着弾後の火炎弾が

小規模爆発を起こす音と、蜘蛛の足を刻む短剣の音と、

パンツパンツと定期的に聞こえる 援護射撃の音。

敵は確実に頭数を減らしている。

蜘蛛は本能に従っているのか、少女を真っ先に狙おうとするのだが、

それを少年が短剣を使って切り刻んだりして少女を守っている。

少女は少年が討ち漏らした蜘蛛を片つ端から狙撃している。

名無しはそこから少し離れた場所で複数の蜘蛛を相手にして戦つて  
いる。

自分の足元に撃ち込む弾丸は空氣砲、体を吹き飛ばして敵との距離  
をとる、

とはいどの方向に距離をとるにも敵に囲まれている為、必然的に

回避先は空中となる、そこから敵に対しても火炎弾を連続発射し、

小規模爆破、炎上を繰り返している。

重力に引かれて自らの体が地面に落ち始める。

その瞬間にリボルバーに装填された弾丸を変化させ、火炎弾から

エアーショット  
空気砲にし、着地の準備をす

名無し 「あれ？」

とそこで不意に違和感を覚える、というより今までの一連の動作に違和感を覚えた。

自分はチームから無断で離れ、少年と少女を助けようとしている、チームメンバーと一緒に行つたら間に合わなかつたかもしぬないが、

自分一人で飛び出してきた時は緊張していたはずだ、

それなのに今の自分は的確に戦場の状況を把握して、

少年と少女の戦闘能力を測つて的確な指示を出して、

自分自身は敵に臆する事もなく平然と戦つてゐる今の現状に違和感を覚えたのだ。

流石にこれはおかしい・・・と、少しだ

少しだけ戦闘に対する集中が解けた

パンツ・・・ブスリツ・・・

少女 「うぐうつ・・・」

少年 「スミレ!」

と少女の苦しげな声と少年の焦った声が聞こえた・・・

咄嗟に少年と少女の居る場所を確認すると、少女が蜘蛛によつて攻撃されていた。

少女の腹の辺り・・・そこに蜘蛛の鋭く尖つた鎌の様な前足が突き刺さり貫通していた・・・

突き刺している側の蜘蛛は既に力尽きていたのかゆつくりと音を立てて倒れる、

その時に少女に突き刺さっていた前足がズブリツと音を立てぬけた。

少女は左腕で穴の開いた腹の辺りを押さえ、右手で硝煙の立ち上がる長銃を握っていた。

少女 「いふつ・・・けはあつ・・・」

体をくの字に折り曲げ、口から血と胃液と何かの混じつたものを吐か、

そのまま地面に倒れた・・・最後まで銃を握り締めていて、その銃

で近付こうとしている

蜘蛛に狙いをつけようとしていた・・・

少年が必死になって少女の元に近付こうとするが、他の蜘蛛がそれを妨害している。

名無し 「しまつー？」

咄嗟にエアーショットの着弾地点を少しずらし、自分の体が真上ではなく、

少年と少女の居る方面に吹き飛ぶように計算して射撃。

予測通り自らの体は少し離れていた少女の付近に吹き飛ばされる。

リボルバーの中の弾丸を変化させ、<sup>ファイアバレット</sup>火炎弾にして、

周りから少女を狙い近付こうとしていた蜘蛛を片つ端から焼き払う。

それをしつつ、傍らに倒れている少女の状態を確認する・・・

状態は簡単に言つと間に合わない・・・

専門的な道具や治癒能力に特化した医者などが居れば余裕なレベルだが

生憎と名無しは治癒能力に特化した医者ではないらしい・・・

頭の中に浮かぶのは簡易な応急処置ばかり・・・

それに医者であつたとしても今この場で出来る訳がない。あたりにはまだ相当数の敵が居る。

敵を全て撃破する前に、この少女は力尽くるか間に合わない状態になるだろう・・・

辺りの敵を倒しながらそんな事を考える・・・助けるつもりが・・・助けられなくなってしまった・・・

そんな風にまた考え方をしてしまった瞬間に、

ジヤーアキンッと、背筋を凍らせるような、鳥肌が立つ様な不快音が響く、

音の方向を咄嗟に向く。

そこには少年がこちらに背を向けて立っていた。

少年の前には血塗れの大鎌を振り切つた体勢で力尽きている蜘蛛が居た。

大型犬程の大きさの蜘蛛が倒れる。そして、その少年の頭が

ズルリッと音を立ててズレしていく

名無し 「つ！？」

ボトリツと少年の頭が地面に落ちて転がり、その目がこちらを見た。

その瞳は何も映していないなかつた・・・

そして一瞬遅れて少年の残つた体から血が一瞬だけ噴水の様に吹き上がつた。

だが、その勢いも一瞬で消え、体が倒れる。

その間に、他の蜘蛛はこちらに対して攻撃してこなかつた。

死した少年の体を貪るうとすべての蜘蛛がその骸へと群がつていく。

## 第十六話 本氣、合流

骸に群がる蜘蛛を一瞬だけ呆然と眺めたが、すぐにリボルバーを握り締め、

骸に有りつけず、じかに狙おつとしていた蜘蛛を撃つ・・・

ブショウッと蜘蛛の頭に穴が空き、一瞬だけ内側からボグツと膨張し、次の瞬間には中身を撒き散らして破裂する。

リボルバーでは連射性能が無い為このままいくと手数が足りない。敵を捌き切れない、だからといって抵抗をやめれば一瞬で刻まれてしまつだらう。

グチャツバギツと言つて肉と骨を引き裂く音を出来る限り無視して、少女を庇う様に立ち回る。

あれから何時間経つだらうか？

もう2時間近く戦い続けている氣がする、実際はほんの数分の出来事だと思つ。

辺りは蜘蛛の肉片のじびりつく甲殻と蜘蛛の手足、その他色々な物が散らばっている。

悪臭が酷い、これが切裂蜘蛛ではなく

スラッシュスパイダー

猛毒蜘蛛だつたら、切り刻んだ蜘蛛の死骸から放たれる、

ボインズンスパイダー

猛毒を含んだ体液にも注意しないといけないが、今は関係無い。

飛び散つた肉片や蜘蛛の体液で足元がドロドロになつて体勢が  
いつ体勢を崩してもおかしくない状態である。

蜘蛛は一気に数百から数千の子を産む。

目算で大体200匹は息の根を止めたが、辺りを埋め尽くすような  
数の蜘蛛は一向に減らない、

しかし、名無しの体力と魔力は見るからに減つていつている。

このままでは体力が尽きて行動不能になるか、魔力が尽きて攻撃不  
能になるかのどちらかである。

と、ここでスイレンの声が聞こえた、幻聴かとも思った。

スイレン 「サウザンドナイフ  
千本短剣」

ヒュンッヒュンッヒュンッ・・・ブスッブスッブスッと何かが飛翔  
する音と突き刺さる音が、

蜘蛛の波の向こう側から聞こえ始める。そこにクルシスの声も聞こ  
えた。

クルシス 「<sup>スラッシュ</sup>ショウイング」「切裂風」

ズバババババーと名無しの丁度背を向けている方向に居た蜘蛛が、

魔法によつて引き起<sup>シ</sup>こされたカマイタチで切り刻まれる。

クルシスは自分に<sup>ハラッショウイング</sup>切裂風を纏わせて突撃している。

蜘蛛の波が途切れた事によつて向こう側が確認できた。

スイレンは長杖を地面に突き立てて魔方陣に囮まれて何かを呑いている。

周りには数百の在り来たりな短剣が高速で回転しながら漂つてゐる。

時々、そのナイフが近付いてきた蜘蛛に高速で飛び、突き刺さる。

ミラーズ 「ああもう、勝手に単独突入は禁止つーつて、その子怪我してんじやない」

気が付けばミラーズが名無しの背後に立つてゐた。

少し名無しに注意した後にミラーズはすぐに倒れている少女の治癒にあたる。

クルシス 「あらかた片付けたぞー···疲れるなあ···

片手で大剣を持ち、周辺を警戒しながらクルシスが近付いてくる。

スイレン 「はう・・・」

スイレンが周りに短剣を浮遊させたまま近付いてきた。

ミラーズ 「治癒は完了・・・じきに目を覚ますわ」

ミラーズが少女の治癒を終えて立ち上がる。

クルシス 「さてと・・・面倒事に巻き込まれた訳だが・・・  
報告にあつた巨大な魔物つてのはあのスラッシュ  
 YusPaiDā の母体

じゃないか?一応見つけたら報告するつてなつ  
ちゃいるが・・・」

クルシスが遠くの方にあるスラッシュ YusPaiDā の母体の亡骸を見  
ながら言つ。

ミラーズ 「倒しちゃつてあるわね・・・報酬出るのかしら?」

ミラーズもその亡骸を眺めて溜息をついた。

ミラーズ 「とりあえずもつ戻りましょ。スイレンは大丈夫  
?」

スイレン 「ふあい・・・」

とてもふらふらしていて大丈夫そうには見えない・・・と浮遊して  
いる短剣が、

いきなり地面に落ちる・・・が、その短剣は地面に着く前に消滅した。

クルシス 「とりあえず名無し、良くなつた。」

いきなり頭を撫でられる・・

名無し 「え？」

注意を受ける事ならした覚えがあるが、褒められる様な覚えは無い・・

ミラーズ 「まあ、貴方がいち早くここに辿り着いたから少女は助けられた訳だけどね・・・

少年の方は・・・まあ・・・

最後の方の言葉を濁した後に、少女を見る。

ミラーズ 「とりあえずこの子は保護しましょ、長銃を回収しなさいよ」

と、ここでミラーズに言われるまで少女が握り締めている長銃が自分の物だと

言ひのをすっかり忘れていた・・・

ミラーズ 「さて・・・気を取り直して戻りましょ

ちなみに、名無しが廃墟から突っ走ったあの森には転移装置が設置されていて、

転移装置を使えばすぐに街と行き来できたのである。

## 第十七話 帰還、魔物化の情報

転移装置を使い、転移装置管理施設に飛び、

そこから蝙蝠獣人の少女を医療施設に運んだ後に、報告書類を纏めてクエストカウンターまで向かった、その時に名無しの単独行動に関してと、

その時の状況と結果を記載した書類を提出後に、無許可の単独行動に対する厳重注意を受けた後に、やつとの事で開放されたのであった。

現在は厳重注意の際に指摘された物資の補給である。

クエスト出発前に準備しておぐのだが、ミラーズがまとめて用意したので、

名無しやスイレン、クルシスは所持していなかつたのだ、

そこの辺りもついでに注意されたのである。

名無し 「疲れた」

バックの中にリボルバーと護身用に手渡された魔力弾を使用しない

通常種の拳銃を入れ、

ついでに発信機と予備の通信機、携帯食料、応急処置キット等を詰め込みながら、溜息をついた。

ミラーズ 「貴方のせいでしょうが」

ミラーズは手元にある携帯食料レーシヨンの使用期限を確認している。

クルシス 「報告は終つたし、保護した女の子の様子でも見に行くか?」

クルシスは既に準備を終えていて、大剣に砥石をかけている。

スイレン 「あの子は大丈夫でしょうか?」

スイレンは一番最初に準備が終つていて、手持ちの杖で地面を突いたりしていた。

ミラーズ 「大丈夫よ、傷に關してはちゃんと治癒はしたから」

クルシス 「こいつ見えてもこいつは医療技術は高いんだぞ」

ミラーズ 「こいつ見えても余計よ」

スイレン 「様子を見に行くんですか?」

ミラーズ 「準備が終つたらね」

手元においてあつた予備弾倉を掴み、中に弾薬が詰まつてゐるのを確認して、

バックの中の取り出しやすい位置に入れ。

それと、渡された弾倉を入れる為の飛び出し防止の止め金具付きのポケットのついた

ジャケットのポケット部分に弾倉を数分入れて、止め金具をしつかりとつけて確認する。

ついでに通信機を入れる部分に通信機を入れて、長銃用の光学標準<sup>スコープ</sup>を取り付けて、

暗視ゴーグルと赤外線ゴーグルを確認してバックに入れて 完了。

バックの重量が40kg前後、ジャケットだけで重さが10kg程という重装備の完成である。

ここに、行く場所によつては酸素マスクや簡易テント等の機材も必要になるらしい。

とりあえず用意した物資に關しては自分の自室に置いておく。

用意された部屋は、そんなに広くは無く、クルシスとの相部屋であった。

以外にもクルシスは整理整頓ができていて、部屋はそんなに汚れていなかつた。

準備が終つたので医療施設に向かつた・・・

医療施設は住居区画から結構な距離がある。

と言つても都市自体がそんなに大きくないので、

離れている＝1駅分あるか無いか程である。

都市内は常に一定温度に保たれていて、酸素濃度も常に一定、

唯一足りない物は天然の太陽光のみである。

それ以外は完璧に整備された人間にとつての楽園のはずであったのだ。

地下都市というのは元々、地上での生活がだんだんとしぐぐくなつていつてしまつたので、

仕方が無く地下に生活に必要な環境を整えた空間を作成し、そこに移住する計画が立てられたらしいのだが、

その計画は地下都市が各国に建設されて、いざ地下空間での生活を～と言づ段階になつて

問題点が発覚した為、中止となつたのである。、

都市一つあれば中で数千年は人類は生きる事ができると言われている。

だが一つの都市に居住可能な人数が人口よりも余りにも少なかつたため、

その問題点に関してをどうにかするまでは地下都市は使用禁止になつていたのだが、

その矢先に魔物発生の事件が起きたのである。

魔物化は海から始まつたと言われている。

海中に居る生物の殆どが肉食になつたり、異常な巨大成長や突然変異等が起きた。

次に鳥、昆虫が変異を初め、動物の変異が始まる頃には、人間にも変異の兆候が見られ始めた。

多量の変異化物質（当時の呼び名）を摂取すると、異常が起こり始める。

第一段階が精神汚染、ここまで進行した人の事を「狂人」と言い、

第一段階では精神不安に駆られ、疑心暗鬼に陥り、

辺りの者を形振り構わず危害を加えると言つ異常行動が見られるようになる。

第一段階が肉体汚染、ここまで汚染された人の事を「死体人」と言う。

第一段階では肉体的变化と知能低下が訪れる。

例えば腕部の肥大化、脳内組織の死滅、筋肉組織の異常発達、内臓器官の退化等が上げられる。

第一段階まで進行した時点で、元々の生物は、生物学的に「死」と断定される。

第二段階が完全汚染、完全な魔物化した個体として識別される。

第三段階では完全な肉体的な変化と、知能の完全な消滅が起きる。

肉体的には一足歩行ではなく四足歩行になり、皮膚組織の硬質化、視野感覚の退化

聴覚・嗅覚の異常発達等が上げられる。

第一段階までなら薬品等の投与により治癒が可能であるが

第一段階以上まで進行してしまった場合は、治癒は不可能である。

ちなみに、死体人は、人間を襲い喰らう事がある。

襲われた人間が死亡した場合、死体人の仲間になるが、

生き残つた場合は、狂人マッドヒューマンになる。

その為、ゾンビに襲われても生き残つて直にワクチンを投与すれば平氣マジなのが、

稀に突然変異を起こして一氣に魔物に進化する場合がある。

その場合、突然変異型魔物として、自我を保持した状態で魔物化する場合があるが、

極稀なケースの為、基本的にこの事はあまり知られていない。

## 第十八話 記録処理

自動的な肉体状態の検査と保管記録の整理を行います . . .

- ・第一注目事項 現在の肉体情報に関して  
体温、血圧に異常は認められず。

肋骨の耐久度の減少を確認、

治癒完了までにかかる予測期間は  
平常生活を継続した場合

時間表記にて48時間28分28秒後に完了

日付表記にて3日後の午後6時13分4秒に完了

睡眠や肉体組織の一時的停止による早急な治癒の場合

時間表記にて0時間0分23秒後に完了

日付表記にて同日の午後5時44分36秒に完了

体内に侵入した病原体による損傷、及びに体内組織の異常は発見で

きず。  
侵入した病原体により発生した体内異常は無し。

筋肉組織に体積した疲労度合い

脚力組織：約38%

腹部組織：約27%

腕力組織：約43%

その他組織：約52%

全体組織疲労率：約45%

早急に疲労の除去に当たる必要性有り

以後脳内組織に関して

一部脳内組織の破損を確認

記憶の保有メモリー部分に通ずる回線の破損により

過去のデータの参照に問題が発生している模様

現在記憶中の脳内のデータ処理に関するデータライブラリを閲覧する為の回線に異常が発生している為、

データライブラリの参照及び保管に関する情報の提示が不可能となつていて。

前回記憶からの情報を参照として必要事項の記載は自動筆記にて行われております。

・第一注意事項 データ保管用メモリーの破損について

破損箇所は過去の記憶保管用メモリ全てに通ずる回線の破損

修復：可能 完了までの時間：1800時間と推定 早急な修復

が必要と判断

データライブラリ参照の為の回路の破損について

修復：不可能 不可能な場合のマニュアルを参考に行動を指示

・第一記載事項 人物

第一人物 スイレン（仮名） 性別：女 身長：158・2cm

体重：48・3kg 戦闘力：A

記載事項：空間に対する固体情報および時間概念のズレを確認 今後も注意する必要有り

第二人物 クルシス（仮名） 性別：男 身長：174・3cm

体重：62・8kg 戦闘力：S

記載事項：近距離戦闘時に協力な火力を誇る、敵対した場合は超接近戦に持ち込む事により対処可

第三人物 ミラーズ（仮名） 性別：女 身長：163.2cm  
体重：53.2kg 戦闘力：S

記載事項：治療術に長けている、敵対した場合は最優先で排除しなければならない

第三人物 老人（名称不明） 性別：男 身長：163.4cm  
体重：53.2kg 戦闘力：？

記載事項：主な情報は不明 情報の所持者であるが不鮮明な情報である

第四人物 女の子（名称不明） 性別：女 身長：124.3cm  
体重：33.8kg 戦闘力：SS

記載事項：妹を名乗る女の子、普通の人間ではない。 固体情報にズレを確認

第五人物 少年（名称不明） 性別：男 身長：152.8cm  
体重：52.3kg 戦闘力：B

記載事項：既に生命活動の停止を確認

第六人物 スミレ（仮名） 性別：女 身長：118.5cm 体重：34.2kg 戦闘力：A

記載事項：蝙蝠獣人の少女 推定年齢10歳前後

その他記載不要候補者 23名

記載身長および体重は視野確認による推定数値 誤差±3.5

・ **第一記載事項** 視野感覚デバイスに起きた異常に關して  
**再燃現象**（フラッシュバック）等の異常を確認

原因是記憶保管用メモリに通ずる回線の破損が原因と見られる。一部データを送信時に回線の破損箇所を通過する際にデータが破損し、映し出される映像や音声がボケていたりずれたりする場合が確認されている。

- ・ 第二記載事項 記憶データのバックアップデータに関して  
今までの記録のバックアップデータの保存の際に  
記憶データおよびデータライブラリ参照の回線の破損によって、  
思考、感情に関するプログラムデータは前回のバックアップデータ  
との  
差異が大多数検知されたため、バックアップデータ保管マニュアル  
を  
参考に別のフォルダ及びにメモリーに保管。  
過去のバックアップデータ呼び出しの際に思考、感情のプログラム  
データが  
多重する事になるため重大なバグや不具合が発生するものと思われる。  
上記記載事項から過去の思考、感情に関するプログラムデータを  
バックアップデータからサルベージ及びに現在プログラムに  
上書きする場合は厳重な忠告の表記を致します。
  - ・ その他記載事項  
38%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合  
現在状態表記を行動不能  
緊急治癒状態の発動
- 以上の情報の以下の情報に書き換えます
- 25%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合  
現在状態表記を戦闘不能  
緊急治癒状態の停止

記録の整理と設定の変更が完了致しました。

## 第十九話 蝙蝠獸人×フルーツフード

医療施設 と言つたが医療施設の集まつた医療区画に到着はしたのだが、道中の記憶が曖昧なのだ。

クルシスとミラーズの後を、スイレンと並んで歩いていて、二、三言スイレンと言葉を交わしたはずなのが、

その内容が全く思い出せないし、なんて返答したかも思い出せないのである。

そして、なぜかスイレンは少し俯き氣味で、落ち込んでいる。

準備をしていた住居区画から出発した時は、普通だったので、

落ち込んでいる原因は明らかに道中の自分との会話の筈なのだが、なぜか会話の内容をまったく思い出せないのである。

そんな事をグダグダと考へながらクルシスとミラーズの後を着いて行く。

カウンターで保護した少女が「えられた病室の場所を教えてもらい、そこに向かう。

医療施設と言つだけあって、中は清潔に保たれていて、

真っ白で薬品の匂いが漂っている そんな場所の一室の扉の前・

・ クルシスがネームプレートの部分を確認して扉の前に立ち、扉をノックする。

？？？ 「はい？」

中から少女の返答 名は確かスミィ である。

クルシス 「入るぞ」

？？？ 「え？」

中から聞こえてくる少女の声は何故か淡々としている。扉を開けて中に入る。

何処の病室も作りは同じなので、

名無じがいの都市で目覚めて最初に見た病室とまったく同じ内装であった。

少女は部屋におかれたベッドの上で体を起こしてこちらを見ていた。

？？？ 「貴方は誰？」

淡々とした言葉で、クルシスを指差して聞いてくる。

クルシス 「おう・・・?俺はクルシスだ・・・が?」

戸惑い気味にクルシスが返答する。

？？？ 「貴方は？」

今度はミラーズを指差して質問してきた。

ミラーズ 「私はミラーズよ」

慌ても戸惑いもせずにミラーズが返答する。

？？？ 「貴方は？」

今度はスイレンを指差して質問をしてきた、人を指差すのは癖の様な物なのだろうか？

スイレン 「えと…スイレンです」

クルシスと同様に戸惑い気味にスイレンが返答をする。

？？？ 「貴方は…助けてくれた、恩人、名前は知らない」

最後に名無しを指差して その時になつて気がついた 少女の瞳は機能していない。

名無し 「えと…名無しだ、それよりも…眼は

スミレ 「私はスミレ、今は視力が無い」

こちらの言葉を遮つて少女が自己紹介をした・・・　スミレの台詞に違和感を感じた・・・

今は視力が無い・・・と言う事は過去には視力があったのだろう・・・

視力を失ったのは切裂蜘蛛スラッシュ・シユ・スペイダーとの

戦闘時であろう・・・確かに顔に対しては攻撃を喰らつていらない筈であるが・・・

普通の人間なら一番の情報源の視力を失つたら慌てるなりなんなりするはずである。

それなのに慌てていない・・・それに見えていない筈なのにこちらの人数と立ち位置を把握している・・・

ミラーズ　　「視力が無いってどういうこと?」

スミレ　　「それよりも、シーライは命を落としましたか?」

スミレは質問に答えずに逆に質問をしてきた。

クルシス　　「シーライ?」

名無し　　「一緒に居た奴か?」

スミレ　　「はい、私と一緒に居た男です、十中八九命を落としてますよね?」

あの戦闘の時に守りきれなかつた少年の名なが出てゐて、名無しは少し俯いてしまつ。

名無し 「すまん・・・」

スミレ 「何故謝罪するのですか？貴方は命の恩人なのですよ？」

スミレは不思議そうにこちらを向いて首を傾げてゐる。

名無し 「いや、守りきれなくて」

スミレ 「別に良いのです、あの人はあの時命を落とさなくともいすれは命を落としたので」

クルシス 「どうして」とだ？

スミレ 「あの人は私と契約コンタクトを結んでいたのです」

ミラーズ 「契約コンタクト？」とりあえず、視力が無いって言つのも含めて説明してくれない？」

スミレ 「良こですよ、少し長くなりますが」

やつとスミレは自分の種族と特性に關してと、あの少年との関係に關して話を始めた。

第一に少女に關して

蝙蝠獣人<sup>フルーフフーデ</sup>であり、年齢は普通の人間に換算すると11歳らしい。

蝙蝠獣人<sup>フルーフフーデ</sup>の特徴は背に生えた皮膜の張った蝙蝠のような翼と、

特殊な器官を使用した音波による位置や空間情報の把握である。

視力が無いというのは少女自身の生まれつきの病気で、蝙蝠獣人<sup>フルーフフーデ</sup>とは無関係らしい、

病室に入ってきた人の人数を把握できた理由と、大体の位置を把握できた理由はそれらしい。

少女は蝙蝠獣人の中では相当な地位を築いている血筋の物らしい事、  
少年は少女の付き人である事、そして契約<sup>ハシタクト</sup>を結んでいた相手らしい。

## 第一十話 吸血鬼へヴァンパイア

フルーツフルーテ  
蝙蝠獣人の中でも、スミレは地位の高い位置を陣取つてゐる血筋の娘らしい、

シーライといつ少年はスミレにつけられた世話人及びに護衛だったらしい、

そして、スミレはいわゆる遺伝的な病氣によつて視力が無いのである。

しかし、蝙蝠獣人の中でも、地位が高い血筋なのに、欠点もしくは欠陥がある事に

対して、スミレの叔父が大いに嘆き、数多くの方法を試して、欠点を補おうとした結果が

“<sup>コントラクト</sup>契約”と言つものが完成した。

“<sup>コントラクト</sup>契約”とは、<sup>ロード</sup>契約者に對して、<sup>スレイヴ</sup>契約側が生命力を削つて

契約者に對して特定の効力を發揮する魔法を常に使い続けてゐる状態の事である。

今回の場合の契約者はスミレ、<sup>スレイヴ</sup>契約側がシーライにあたる。

契約の効力はスミレの視力の回復だといつ。

スレイヴ  
契約側である、シーライが命を落としたため、<sup>コントラクト</sup>契約が強制解除され、

スミレの一時的な視力回復の「<sup>「」</sup>」契約が解け、視力を失ったという訳らしい。

この契約は<sup>「」</sup>契約側の寿命を物凄い勢いで削っていく、  
そのため、スミレが言つていた「あの時命を落とさなくても～」といふのは、

シーライに残された生命力が残り少なく、もうすぐ死ぬといふ事だつたらしい。

スミレ 「他に説明は必要かしら？」

見えていない筈の眼でこちらの眼を射抜きながら、淡々と語つてい  
る少女は

まるで<sup>オートマタ</sup>機械人形、そんなイメージを受けた。

クルシス 「あん？ 何でそんな地位の高い血筋のお嬢様なんだろ？  
何であんな所に居たんだ？」

ミラーズ 「確かに、護衛がその契約者の少年一人つてのは可笑し  
いわよね？」

クルシスとミラーズの言つ通りで、それだけの地位を持つてゐる血  
筋の娘ならば、

あんな危険な場所に居るのは可笑しいはずである。

スミレ 「単純に逃げ出してきただけ」

またしても単調で、まるで原稿用紙に書かれた事をそのまま言つて  
いる様な感じの言い方。

スイレン 「逃げ出してきた？」

スミレ 「そう、逃げ出してきた。」

今度はスミレがスイレンの方を向く、その際に首だけを動かしてス  
イレンの方を向いた、

そして淡々と口が語りだす、本当に機械人形にしか見えないのだが、

簡単な治療をミラーズが行つてゐるし、ここに来てからもちょっと  
した検査を行つたので、

機械人形ではないのは確かなのだが、やはり印象は機械人形っぽい  
印象を受ける。

スミレ 「今の血筋を残す為にと、やりたくない事を強制され  
たので逃げ出してきた」

スミレの淡々とした説明を纏めると、スミレは叔父上の強制的な命  
令に嫌気が差し、

世話人兼護衛をかねていた契約側の少年のシーライを引き連れて、  
スレイヴ

蝙蝠獣人達が暮らす小型都市から逃げ出してきたらしい。

都市の外は危険なのは理解していたが、あの都市に居る方が危険だと判断したらしい。

都市名は「ブラッド」と言う名称の、小規模地下都市らしい。

その都市の位置はこの都市から徒歩で半日、車両を使って2時間程の場所らしいのだが、

スミレの言う地域座標には何も無い、

外部との連絡用手段の無線システムが機能していないのか、機能させていないのかどちらかである。

スミレの説明だと、その都市の蝙蝠獣人フルーツマークの大半はあまり友好的ではないらしい。

基本的に好戦的でもないが、排他的であり同種族間での仲間意識が強い、

そのため、外部の人間等を歓迎したりはしない、むしろ追い返されるのが関の山だらうと言つていた。

そして、スミレは今後の行く当てが全くないので当分の間はこの都市に住むという事になった、

視力が無いとは言え、人間には無い超音波を発し、感じ取る器官があるので、

視力が無くても日常生活に支障はないので、今の所“**「コントラクト」**”に<sup>コントラクト</sup>は契約側

契約側の<sup>スレイヴ</sup>人間を探す気は無いらしい。

契約側<sup>スレイヴ</sup>になる為の条件と言つのは特にある訳ではなく、

契約者が<sup>スレイヴ</sup>契約側に誓いをさせればいいのである。

誓いと言つのは契約側の体液を<sup>スレイヴ</sup>契約者が飲んで、

その後、<sup>ロード</sup>契約者の体液を<sup>スレイヴ</sup>契約側に飲ませれば完了<sup>アフタ</sup>と言つ事らしい。

体液と言つのは基本的に血液で行う。

そのため、<sup>フルーチフーデ</sup>スミレの血筋の人間は<sup>ヴァンパイア</sup>蝙蝠獣人の中でも<sup>ヴァンパイア</sup>吸血鬼と呼ばれていたらしい。

だが、基本的に伝承に出てくる吸血鬼と違つて、犬歯が尖つているわけでも、

太陽の光、<sup>クロス</sup>十字架、水が苦手な訳ではないし、杭で心臓を貫かなければ死なない訳でもない。

生命力自体は通常の<sup>ヒューマン</sup>人間と変わりは無い。

ただ、二ノ二クだけはスミレ血虫が苦手らしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2189y/>

消失した記録～ロストメモリー～

2011年12月1日18時03分発行